

第 47 回(2022 年度)北海道建築賞

株式会社照井康穂建築設計事務所

照井 康穂

作品名－「浦河フレンド森のようちえん」

第 47 回(2022 年度)北海道建築奨励賞

株式会社宮城島崇人建築設計事務所

宮城島崇人

作品名－「Oproject」

第 47 回(2022 年度)北海道建築奨励賞

株式会社アトリエブク

村國 健

作品名－「夕張市拠点複合施設 りすた」

(以上 敬称略、五十音順)

審査経緯

2022年度の北海道建築賞委員会は、2021年度の体制から主査ならびに委員の入れかえを行い、前回の7名体制から5名体制に改めた編成とした。

2020年度は、同年春から続く世界的規模の新型コロナウイルス感染拡大を受け、やむなく募集を中止したが、2021年度は、審査段階において感染状況を注視するとともに、期間中にできる限りの感染防止措置をとることを前提に募集を行い、北海道建築賞ならびに北海道建築奨励賞の選考を行った。表彰式は、出席者の数を限定し規模を縮小した開催とし、結果的に、関係者への直接的な感染をおこすことなく一連の審査と表彰を終えることができた。2022年度は、4月時点でまだ感染は十分には収まっていなかったものの、前年度に培った感染防止措置を踏襲することによって、募集ならびに選考が可能と判断し、例年通りの開催要領とスケジュールに従い、4月15日に募集を開始することを決定し、4月7日に日本建築学会北海道支部ホームページ上で募集要領を公開した。

第1回審査委員会を、5月13日にオンライン方式によって開催し、北海道建築賞表彰規定、審査日程、審査方法などについて審議した。また、応募作品は自薦による応募のみとし、委員会からの応募推薦を行わないことを確認した。

第2回審査委員会は、応募締切後の5月25日に対面方式によって開催した。まず作品審査に関わる学会の倫理規定と審査方法を確認した上で、応募のあった下記16作品すべてを審査対象にすることを決定した。尚、応募作品中に、応募者ではないが審査委員が関与するものがあったため、日本建築学会が定める『3.3.20 論文・作品の発表の場におけるピアレビューに関する倫理規定』を遵守する観点から、その委員は、当該作品の審査時には退席し選考に関わらないものとした。

応募作品および設計者（応募順、敬称略、設計者名は応募書類による）

- ① 仁木 H～現代の竪穴式住居（清正崇/清正崇建築設計スタジオ 一級建築士事務所、若井和典/仁木ヴィニヤード）
- ② 夕張市拠点複合施設 りすた（村國健/株式会社アトリエブング）
- ③ 木下林業新社屋（菅家太/菅家太建築設計事務所）
- ④ 子と子と子と子と（山下竜二/山下竜二建築設計事務所）
- ⑤ 福田歯科医院の増築（桐圭佑/ KIRI ARCHITECTS）
- ⑥ 森の素形（高野現太/一級建築士事務所 GLA）

- ⑦ KDD エボルバ Polaris_Sapporo (中里嘉亨/株式会社竹中工務店東京本店、垣田淳/同北海道支店、丸林哲/同東京本店)
- ⑧ ザ ロイヤルパークキャンパス 札幌大通公園 (緒方祐磨/株式会社三菱地所設計建築設計二部、諸伏勲/同構造設計部、山田風人/同構造設計部)
- ⑨ 北海道科学大学 D 棟/E 棟/F 棟 (西尾吉貴、上甲孝、興石秀人、松延浩人、民野志織/大成建設株式会社一級建築士事務所)
- ⑩ 国立アイヌ民族博物館 (海老原靖子、松谷悟詞/株式会社久米設計)
- ⑪ 浦河フレンド森のようちえん (照井康穂、古田優一(元所員) /株式会社照井康穂建築設計事務所、徐光/株式会社ジェーエスデイー)
- ⑫ O project (宮城島崇人/株式会社宮城島崇人建築設計事務所)
- ⑬ 曾澤高圧コンクリート株式会社 深川工場 (圓山彬雄/株式会社アーブ建築研究所、徐光/株式会社ジェーエスデイー)
- ⑭ ハネダシの家 (渡部亮太/株式会社北渡建設)
- ⑮ 北ガスグループ本社ビル (大山政彦、永島健児/株式会社日本設計、丸山茂生、堀越英昭、松本隆/鹿島建設株式会社)
- ⑯ FENIX FURANO (須藤朋之、山脇ももよ/ SAAD/建築設計事務所)

例年通り「先進性」「規範性」「洗練度」の3項目を基本的な評価軸とし、上記すべての応募作品を対象に、各委員が所見を述べ議論を進めた。その結果、評価の高かった②夕張市拠点複合施設りすた、⑥森の素形、⑪浦河フレンド森のようちえん、⑫O project、⑬曾澤高圧コンクリート株式会社深川工場の5作品を選定し現地審査の対象とした。現地審査は、7月19日に②、7月26日に⑬、8月1日に⑪、8月3日に⑥⑫を委員全員で行った。ただし、この中に1名の委員の関与がある1作品が含まれていたため、当該作品の現地審査では関与のあった委員を不参加とした。

第3回委員会を、8月25日に対面方式によって開催し、現地審査を行った5作品を対象に最終選考を行った。1名の委員の関与があった1作品に対する議論については、主査判断により当該委員には退席を求め、採決時には当該作品への投票から除外した。まず、各委員が5作品に対する所見を述べた上で、各作品の評価について全委員で議論を深めた。その上で、当委員会が定める「申し合わせ事項」にある「受賞対象者は、設計プロセス全体の実質的な設計統括責任者であり、原則1名である」(2006年)を確認し、北海道建築賞ならびに北海道建築奨励賞それぞれの主旨を踏まえた上で、最終投票を挙手によって行った。その結果、北海道建築賞について⑪の照井康穂君を、北海道建築奨励賞について②の村國健君、ならびに⑫の宮城島崇人君を、2022年度の受賞対象作品と対象者にすることを委員の総意として決定した。

「浦河フレンド森のようちえん」は、浦川町東町の北部にあって、まちと森が接する位置にたつ幼保連携型認定こども園である。子どもたちが、隣接する森から日々様々なことを学びつつ、建物内外に安全・快適に過ごせる場をつくるのが、施主の幼児教育に対する思いである。設計者は、道産カラマツ材を使用した1辺が3,300mmの正四角錐を1ユニットとした立体トラスを最大で3層に積み、建物中央部には3スパン分の無柱空間を設けることによってこれに応えた。正四角錐のユニットは、大屋根に覆われたひとつの空間の下に適度なスケール感を与え、子供たちが木登りをするような感覚で自由に楽しく遊び動きまわれる場をつくっている。個別の用途にあわせて、正四角錐ユニット内において仕切られた空間では、空間が斜上部の方向に展開するなど、意外性に満ちた空間の繋がりや自然採光の効果がもたらされている。木材の接合部はシンプルに整理されており、構造設計者の確かな技術と経験が裏打ちされていることが見てとれる。設計者が施主と協議を重ね、価値観を共有した上で、空間構成、意匠、構造を纏め上げたデザインの力量が高い評価を受けた。

「夕張市拠点複合施設 りすた」は、深刻な人口縮減に直面する夕張市における公共施設再編を象徴する事業である。バスの待合交流スペース、図書コーナー、乳幼児スペース、多目的ホールなどが、ひとつ大屋根の下におさめられた複合施設となっている。利用者は、高齢者、学校に通う子供たち、子育てをする母親と幼児など多様で、緩やかなゾーニングとそれぞれの場に適したつくりこみが丁寧に行われている。やや変形した台形状のプランをもつ建物ボリュームは、敷地と周囲の地形やまちのコンテクストを読み込んだ上で、注意深く配置されており、新しいまちの拠点に相応しい場を建物内外につくり、爽やかな景観を生み出している。鉄骨による大屋根の架構、カラマツの構造用合板による天井ルーバー、冬季には雪をたたえ夏季には快適な日影をつくる大きく張り出した厚い庇、屋根から大胆に立ち上がるトップライトなどは、設計者が所属する設計事務所によって長年修練を重ねてきた積雪寒冷地におけるデザイン手法だが、本作品では、それらが意匠、構造、環境面において総合的にスタディされ、バランスよく纏められている点が高く評価された。

「O project」は、札幌市街地の住宅地にある緑豊かな公園に隣接してたつ、ツーバイフォーの木造住宅を増改築したものである。延床面積わずか30m²余りの増築部分は、中央にたつ2本の柱によって床と屋根スラブをもたせたRC造である。外周部はガラスで覆われ、外観上、構造壁が主となる既存木造部分と対比をなし、床の高さをGLから1,200mm上げることによって、公園を臨む開放的な空間が浮いたようにつくられている。内部では、既存部分と増築部分が、段差によって床レベルをかえながら、性格の異なるふたつの空間を開放的かつ直接的に接合し一体化している。一方で、行政との協議によって、公園との敷地境界線上にたつ塀を最低限の高さにおさえていることが効果的に働き、公園側からみた増築部分は、まるで公園の一部であるかのような不思議な存在感を伴いながら建っている。公園、既存

建物、増築建物がつくる一体の風景は、どこか港の棧橋とそこに係留された船のようにも見える。増築部分の屋上テラスからは緑豊かな公園を見渡すことができ、そこに遊ぶ子供たちの明るい声が聞こえ楽しく心地よい。モダニズムの文脈を意識させながら、小さな住宅を通じて、濃密な現代の都市空間における建築の現れ方を問おうとする設計者の意図とその成果として高い評価を受けた。

「森の素形」は、札幌市手稲区の緑豊かな高台に建てられた、小さな事務所用のワークスペースを併設する戸建て住宅である。建物全体は、外壁を道南杉貼としたシンプルな直方体のボリュームに纏められ、豊かな樹木の中であって佇まいが美しい。玄関前のアプローチ空間も使いこなされた材料によって丁寧に作り込まれており、来訪者の期待は高まる。建物内部では、ボリュームの長手方向に軸となる動線空間を貫通させ、軸線に沿って3つの中庭と個別の室が配置されている。水まわりの一部を除いて、各室は扉がなくオープンで、コンパクトに纏められた様々な空間、中庭、外部の風景が連続する楽しく広がりをもった構成となっている。合板を用いた構造壁をボックス状の形に纏め、その内部を収納スペースとし、内部仕上げ材の選択や、手すりや階段、造作まわりのディテールに至るまで、小さな住宅ながら施工や製作に携わった職人との高いレベルでの協働を見てとることができ、設計者のデザインが様々な水準に行き届いている点が評価された。一方で、高い精度のつくり込みや、随所に見られた様々なデザイン言語が、今後どのように発展しうるのかについて、改めて評価をする機会が必要ではないかとの意見がだされた。

「曾澤高圧コンクリート株式会社 深川工場」は、プレキャストコンクリート造による計10個の部材を鋼棒、鋼線で緊張させて基本架構として組み上げ、これを13組つなぎ合わせることで、スパン25m、奥行き50m高さ12mの大空間を実現したものである。このプレキャストコンクリート部材の製作に使用された鋼製型枠は、設計者自身が、以前東京において設計した三幸学園東京未来大学体育館で使用されたものである。このように、鋼製型枠を用途と建設地の異なる建物に再利用したことは我が国では異例で、コストの縮減だけでなく環境負荷の低減が求められる現代にあって先導的な事例と言える。また、意匠設計者、構造設計者に加え施主である企業の技術者が、構想と設計段階当初から協働し、移動式クレーンと架構の取り合い、各部材の形状や納まりのディテールに至るまで、注意深くスタディが重ねられている。非構造部分に、コンクリート3Dプリンターで作成した壁を使用するなどの挑戦も見られる。このようなアプローチが評価を受けたが、本建築は主に土木資材を製作する用途に限られたものであり、建築作品としての評価については限定的にならざるを得ないとの意見がだされた。

(文責：小澤 丈夫)